

【寄稿】

小学校現場における授業の ユニバーサルデザイン研究の可能性と課題

村 田 辰 明

1. はじめに

授業のユニバーサルデザイン（以下、授業UD）とは、特別な支援が必要な子どもを含めすべての子どもが楽しく「わかる・できる」授業設計である。今、各地で授業UD研究が広がっている。校内研修のテーマに授業UDを掲げる小学校は珍しくない。隣接した複数の小学校と進学先中学校が共同で授業UD研究に取り組むケースも増えてきた。市町村単位で授業のUD化に取り組む動きも目にするようになってきた。なぜ、こうも広がるのだろうか。もちろん、授業UD研究が、すべての子どもの「できる・わかる」の実現をめざし、全国各地の授業実践を通じて、教師がその有効性に手ごたえをつかみつつあることが最大の理由であろうが、ここでは、それ以外に、授業UD研究に取り組むよさは何なのかを論じたい。

2. 「共通性」と「裁量権」

どの教室でも、授業にのれない子どもがいる。ベネッセ教育総合研究所（2015）によると、小学校5年生に、各教科の好き嫌いを尋ねたところ、「とても好き」「まあ好き」の肯定的評価が、国語（58.5%）社会（55.6%）算数（68.4%）に留まっている。教科によっては、授業開始時点で、二人に一人はすでに授業から脱落しかけているということだ。厳しい。この状況の中で、授業UDに可能

性を感じている教師は多い。

授業をUD化する視点として、「共有化」「焦点化」「視覚化」「展開の構造化」「スモールステップ化」などがある。（図1.）これらの視点が、授業にのれない子どもも含めすべての子どもをなんとかしたいが、でもどこから手をつけたらいいかわからない教師に貴重な手がかりを与えてくれる。

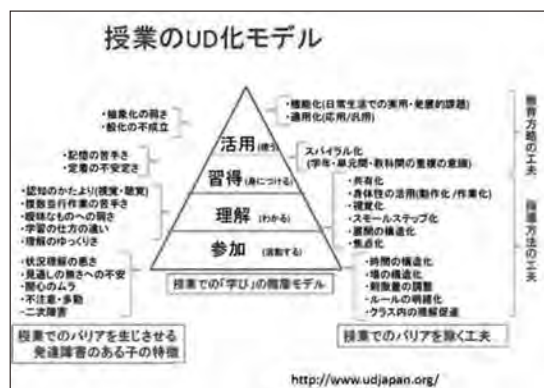


図1. 授業のUD化モデル

ただし、そこから先は、教師の「職人性」が問われることになる。一言で「視覚化」と言っても、それはあくまで具体的支援を考える際の視点である。何をどのように視覚化をするのか、ブラインドをかけるのか、アップとルーズを組み合わせて提示するののかは、自分のクラスにどのような子がいるかによって決まる。たとえ同じ教師が2年続けて、同じ単元の授業をしたとしても、子どもが

違えば、同じ視覚化でもその方法はかわってくることになる。

「焦点化」「共有化」「視覚化」など授業をUD化する視点がもつ「共通性」が、教師に「安心感」を与えてくれる。さらに、そこから先で具体的支援を考える際に、教師一人ひとりに与えられている「裁量権」が、自分は目の前にいる子どもにしっかり向き合っているという教育的職人としてのやりがいを感じさせる。この絶妙な「共通性」と「裁量権」のバランスが、授業UD研究に取り組むよさ・可能性の一つである。

3. 「主体的・対話的で深い学び」と「授業UD」

新学習指導要領で「主体的・対話的で深い学び」の実現が求められている。授業UDは、それとも親和性が高い。授業UDの実践にも良い実践、そうでない実践があるので、授業UDを掲げた実践すべてが、「主体的・対話的で深い学び」になるとは言わない。これは、授業UDを含めどんな流儀の実践にも言えることだ。ただ、すべてとは言わないが授業をUD化すると、「主体的・対話的で深い学び」に近づきやすくなる。キーワードは「深い学び」である。

澤井(2017)は、「主体的・対話的で深い学び」について、「主体的であること、対話的であることは、いずれも『いい授業』の必要条件だと言えるでしょう。ただし、必ずしも十分条件とは言えません。『いい授業』たり得るには、『深い学び』が、不可欠なゆえんです。すなわち、『深い学び』があってはじめて、その授業は望ましいものとなり、アクティブ・ラーニングの条件を満たすと言えます。」と述べている。主体的学び、対話的な学び、深い学びのうち、特に深い学びがポイントとなるのである。

一方、授業UDはどうだろう。授業UD研究で評価される授業は、必ずと言ってよいほど、「焦点化」「共有化」「視覚化」などが、教科の本質につながっていくように考えられている。授業UDそのものは授業設計なので目的にはなりえない。

あくまで目的は、すべての子どもが楽しく参加・理解し「教科の本質」に迫ることであり、授業UDはそのための方法である。「深い学び」の実現という点において、教科の本質を見据えた授業設計を希求する授業UD研究と、新学習指導要領が志向する方向は軌を一にしている。よって、これから教師が取り組んでいかなければならない授業改善の有効な方法の一つとして授業UD研究をとらえることは、校内研修の正攻法となりうる。これも小学校現場で授業UD研究に取り組むよさ・可能性の一つである。

同時に、学校全体で授業UD研究に取り組むことで、教師が授業を分析する視点を共有することが可能となり、学校全体の授業力があがることになる。多くの教師の授業が安定することが学校全体の安定につながる。これもまた、授業UD研究に取り組むよさである。

4. 小学校現場における授業UD研究の課題

小学校現場で授業UD研究が広がる今だからこそ、注意したいこともある。

一つ目。何のための授業UDかを再確認すること。目的は、すべての子どもが教科の本質に楽しみながらたどり着くことである。授業UDのブームによって、意味のない視覚化をしたり、必要のない場面で共有化を図ったりすることはない。UD風の授業は、目的を見失っている。本末転倒である。

二つ目。先のモデル図を更新すること。授業UD研究は始まったばかりである。現時点でもモデル図の信頼性は高いが、全国各地の実践を通じて、より洗練、精緻化していくことが大切である。

今こそ、子どもの困難さと可能性、教科の本質から目をそらさない「誠実な授業UD研究」が求められる。

【文献】

- ベネッセ教育総合研究所(2015):第5回学習基本調査。
澤井陽介(2017):授業の見方。東洋館出版社。